変わる日本の「暮らし」と「まち」

団地とまちの人と人を結ぶ夏祭りの復活

奈良県　中登美第3団地
N art Project
（2016年●平成28年～）

阿部民子 text by Tamiko Abe

illustration：Shigeyuki Sakata

夏休み最後の土曜日となった8月25日の午後4時過ぎ。奈良市北西部にある中登美第3団地の集会所前広場に、浴衣姿の子どもや家族連れが続々と集まってきた。保育園児が描いた提灯で飾られた広場で行われたのは、団地の夏祭り。多くの人で賑わう会場には人気飲食店のブースやヨーヨーすくいなど25もの出店が並び、おこづかいを握りしめた子どもたちが楽しげに走り回る。じつはこの夏祭り、住民の高齢化などを理由に一度なくなっていたのが、地域の有志によって昨年復活したものだ。

バドミントンのシャトルとバケツで手づくりの的当てを出店していた、地元の少年野球チーム「奈良北ゴールデンカイト」の保護者代表片岡徹さんは「準備は大変でしたが、みんなが喜んでくれるのがうれしいですね」と満面の笑み。浴衣と甚平姿の幼児を連れた女性は「今年は大雨で幼稚園のお祭りが中止になったので、子どももすごく楽しみにしていました。アットホームな雰囲気で、小さい子を連れてくるにはちょうどいい感じ」と楽しげに話してくれた。

フィナーレには団地のご婦人主導の盆踊りも復活。最後の「ダンシング・ヒーロー」では、広場中の人が輪になって踊り、祭りは大盛況で幕を閉じた。

手作りで夏祭りを復活して笑顔いっぱい。

若い力で夏祭りを復活

高級住宅街が広がることで知られる近鉄「学園前」駅からバスで10分ほどの地にある、中登美第3団地。入居が始まったのは高度成長期の1967年。賃貸と分譲があり、賃貸だけでも約2500戸を擁する奈良県最大規模の団地だ。

その一角にある、カフェと雑貨の店「アンティーム」は、団地や地域の住民のオアシス的存在だ。営んでいるのは、デザイナーの加来慎太郎さん（39歳）と真紀さん（36歳）兄妹。中登美第3団地で育ち、一度離れたものの東日本大震災を機にともに帰郷。いまも、二人そろって中登美第3団地に住んでいる。

「子どもの頃の団地は入居するのにも抽選で、すごく活気がありました。外に出ると必ず友達に会うし、グラウンドや公園も毎日場所取り競争。お店もいっぱいあって、周りの住宅からも買い物にきていました」と真紀さん。

ところが大人になって帰ってくると、様子が一変していた。

「子どもの数がめっきり減って、お店も軒並みシャッターが閉まっている。あまりの違いにびっくりしました」と慎太郎さん。特に落胆したのは、子どもの頃楽しみだった夏祭りが、自治会の高齢化などで中止になったことだった。

「夏祭りで密かに好きだった子に会ったり（笑）、懐かしい夏の思い出ですよね。その楽しさを自分たちの子どもにも、味あわせてあげたい！」と仲間に呼びかけ、夏祭り復活へと動き出した。

その動きをバックアップしたのが、団地の管理を行うURだ。集会所や広場の提供、チラシづくりを手助けするのに加え、団地を盛り上げるボランティア「中登美アンバサダー」を募集。真紀さんのママ友の徳永祐巳子（ゆみこ）さんは、「みんなが楽しんで、団地や地域に活気が戻ってくれれば」と、団地の外から参加した。加来さん兄妹をはじめとするメンバーは、SNSでの発信やチラシづくり、寄付金集めなどに奔走した。

「準備期間はたった1カ月半。人が来てくれるのか心配だったけど、ふたをあけてみたら、こんだけ人がおったんやって驚くほどの大盛況。みんな、お祭りを待っていたんですよね。予想以上の人出に売り切れ店続出で『よかった、楽しかった』ってすごく喜んでもらえました」と真紀さんは話す。

その勢いに乗って、1月には餅つき大会、4月には花見を兼ねたフリーマーケットも開催された。アンバサダーの森川孝さん、薫さんご夫妻は「亡くなったおじいちゃんがお餅を大好きだったから、仏前にお供えしますって涙していたおばあちゃんがいて、聞くと、めったに外に出ないのが、出る気になってくれたとか。この団地は高齢者やお一人の方も多く、少しでもお家から出てコミュニケーションがとれたらという思いがあったので、これや！と思いましたね」と語る。

イベントで団地とまちを活性

「中登美第3団地では、2016年から、リノベーション、カルチャー、アート、イベントの4つの柱で団地を活性化しようという『N art Project』を立ち上げて、さまざまな活動をしてきました。そのなかで加来さん兄妹と知り合い、夏祭り成功のお手伝いができたのは、うれしいですね」と話すのはUR西日本支社の宮村嘉人（よしひと）だ。前任者の大内将樹は「加来さん兄妹やアンバサダーさんの繋がりでここまでできました。まさに、人は団地の財産です」と語る。「URが引っ張るのではなく、行動したい方を側面で応援できれば」と団地マネージャーの加藤啓も声をそえる。

祭りを終えた慎太郎さんは「イベントを通して、人と人が繋がって、普段出会わない人が出会い、地域の人が顔を見せ合って、団地もまちも盛り上がってくれたらいいですよね」。真紀さんも「私達が楽しんでいるのを見て、みんなも何かやりたいと思ってもらえれば。そして、この団地面白そう！って住む人が増えて、昔のような活気が戻ってくれたらうれしい」。団地を愛し、まちを愛するエネルギーが、新しい団地の未来を拓いていく。

街に、ルネッサンス
UR　UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社